

玄々齋と又日庵の茶道具

橘 倫子（茶道資料館学芸員）

講演日・平成二十三年三月十二日

この度の新春展「近代茶道の先駆者 玄々齋と又日庵」では、裏千家十一代玄々齋精中（一八一〇―七七）と、一八歳年上の実兄・渡辺規綱（又日庵 一七九二―一八七二）を取り上げ、両者にゆかりの茶道具約一二〇点を三期に分けて展示しています。

兄の又日庵は三河国奥殿藩（現愛知県岡崎市）の藩主・松平乗友の二男、玄々齋は同じく五男として生まれましたが、又日庵は尾張徳川家の家老を務める渡辺半蔵家の養子となり、玄々齋も裏千家に婿養子として入りました。

昨年は、玄々齋の生誕二百年にあたり、岡崎市美術館（愛知県）において特別展「茶の湯の文明開化―茶人玄々齋の生涯と奥殿藩松平家―」が開催されました。裏千家からも茶道具を中心に、約一二〇点を出品しましたが、玄々齋ゆかりの茶道具



又日庵倉帳 豊田市郷土資料館蔵

を一室に集めて紹介する好機となりました。そこで、岡崎での特別展閉会后、テーマを新たに設け、茶道資料館の新春展としてもこれらの作品を展観することにしました。

今回の展覧会では、テーマの変更に合わせて、又日庵ゆかりの茶道具を何点か追加して紹介しておりますが、元々、玄々齋

の生誕二百年を記念して集められた作品ですので、圧倒的に玄々齋ゆかりのものが多く構成となっております。

そこで、「又日庵倉（蔵）帳（注）」を用いて、文献史料からの分析を加えながら又日庵が所持していた茶道具について補足説明をしたいと思えます。又日庵の倉帳は七冊ですが、恐らく他にも何冊が存在したのと思われる。例えば、茶碗の項では付した番号が途中から始まっていたり、茶杓の記載が全くなかったり、他の茶道



鶏首籠花入



又日庵倉帳

具の数と比較しても不自然な部分があります。掛物が約二七〇点、茶入・甕が約一二〇点、水指が約八〇点・・・という所蔵数から考えて、茶碗が四〇点、茶杓がゼロというのは考えにくい数です。恐らく、そのあたりを記載した冊子が逸（はぐ）れしてしまったものと思われる。しかし、何冊か欠いた状態でも一二三四点の茶道具が確認され、かなり多くの茶道具を所持していたことがわかります。中でも目を引くのは、向付や鉢などの懐石道具が充実していることです。本格的に茶事を楽しんでいたことが伺えます。また、倉は一階と二階からなり、おおよそ道具別に分類して収納し、棚廻りや長持ちの引出しに番号と

記号を付けて、そのグループ毎に管理していたと思われる。記載内容から見て、天保期（一八三〇―四四）頃に道具名がまず書き込まれ、明治初頭までの三、四十年の間に少なくとも数回、虫干しなのでしょいか、

一斉に在庫を確認し、確認できずのものには○や△の記号を付しています。また、道具の出入りもあり、追加で入手したものは末尾に書き込まれています。誰かに贈ったものには取り消し線が引かれ、行間には何時、誰に



又日庵肖像画

贈ったのか、記されている。さらに、「奥へ遣わす」と記されたものもあり、倉とは別に母屋のほうにも茶道具が置かれていたことがわかります。



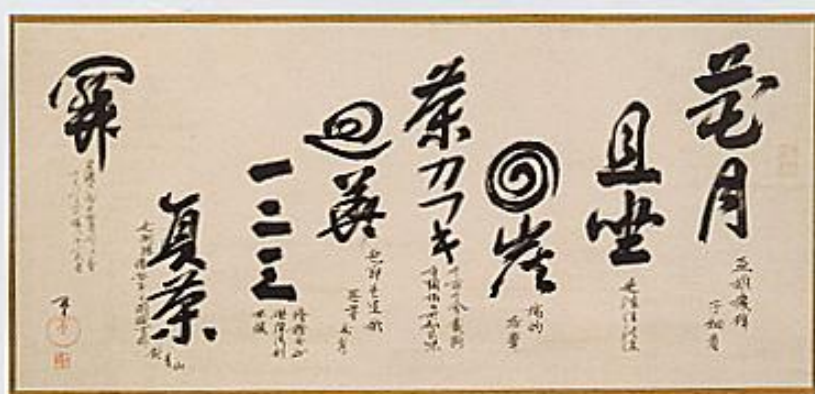
玄々斎肖像画

さて、この倉帳の中には、今回の展覧会に出品されている作品が多く含まれており、そのいくつかを紹介したいと思います。まず、古銅の鶴首形花入を竹籠で写した鶴首籠花入（玄々斎好栗田元三作）ですが、玄々斎によって同じも

のが五十個作られました。展覧会に出品されているものは、香道の志野流家元・蜂谷家へ贈られた花入ですが、同じ花入が又日庵にも贈られて倉に入っています。また、少庵の二百五十回の遠忌に玄々斎によって写された三島角水指や、玄々斎の長男・一如斎の濃茶点始めの披露



竹茶杓 銘谷陰 又日庵作
豊田市郷土資料館蔵



七事式俣 玄々斎筆 今日庵藏

として二十八個作られた曙霰なども記載されています。あるいは、嘉永四年（一八五二）に玄々斎が江戸に出仕した際、玉川焼の茶碗を何点か焼いて江戸土産としたものも、倉帳に確認できます。茶碗の見込みに玄々斎の花押があり、納められた箱の蓋には玄々斎が武蔵野の情景を詠み、墨書しています。

このように、倉帳には玄々斎ゆかりの茶道具として、今日まで伝わっている数々の道具が記載されており、とりわけ裏千家歴代の遠忌や甥（玄々斎の長男・一如斎）の大切な節目となる行事を記念して贈られた茶道具が



曙霰 八代中村宗哲作

又日庵の許に多く所蔵されていたことは、玄々斎との深いつながりを考える上で重要ですが、倉帳以外で二人の深いつながりを窺い知ることができない資料があります。それは、又日庵と玄々斎の往復書簡です。今回は、軸装された往復書簡二点を展示しました。往復書簡とは、差出人が書いた手紙の余白部分を利用して、受取人がその手紙の返信をそのまま書き込んで送り返したものです。本来ならば別紙を用いて返信すべきところを、返信を大変急いでいる場合や、旅先などで手紙を受け取り、返信用の紙が用意出来ない場合に、この往復書簡の形式



三島角水指

が答えるという方法を取っています。一幅は不見斎好みの松の木香合について、もう一幅は茶杓の削り方について、又日庵が玄々斎に詳細を尋ねたものです。松の木香合については、香合の形や箱書の様子も書面に描かれています。茶杓については、玄々斎が削った茶杓を参考にしながら自らも茶杓を削ろうとした又日庵が疑問点を玄々斎に確認した内容です。



黒茶碗 銘幽玄 又日庵作 今日庵蔵

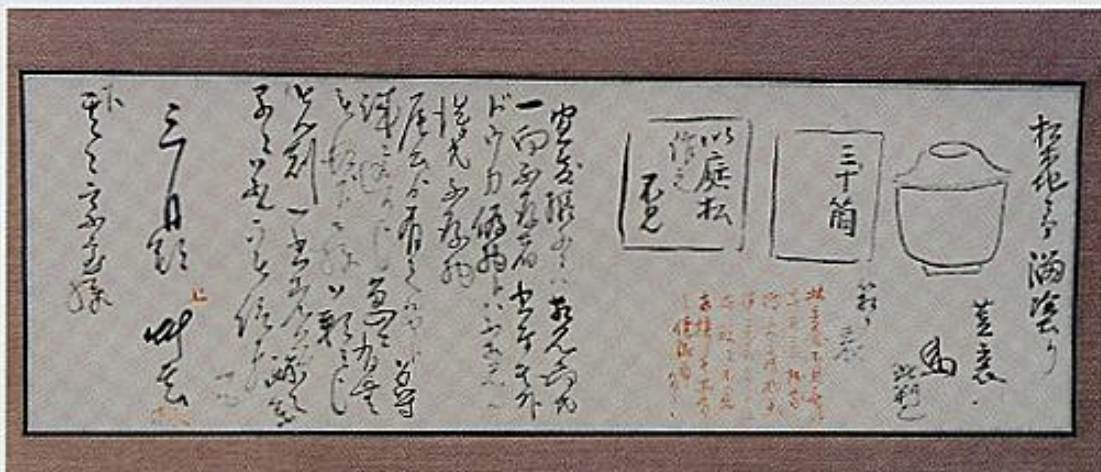
を取ります。しかし、親しい間柄でなければ許されない形式でもあります。又日庵と玄々斎の場合は、この往復書簡によって、茶道具について又日庵が玄々斎に質問をし、家元である玄々斎

点展示していますが、その中で最も又日庵らしい銘のついた茶杓を紹介しましょう。それは、「一本館」という銘の茶杓です。深い樋のある白竹を用い、權先を剣先形に削った特徴ある茶杓です。

又日庵が養子となった渡辺家の初代守綱は「槍の半蔵」と呼ばれた槍の名手です。歴代当主は初代守綱から「綱」の一字を取り、「渡辺半蔵○綱」と名乗りました。又日庵も渡辺半蔵規綱という名前です。展示室の入口には又日庵・玄々斎兄弟の肖像画のパネルを展示しておりますが、よく見ると、又日庵の着物には三ツ星一文字紋が描かれています。これは、槍術の渡辺流の家紋でもあります。また、又日庵の刀にも紋が描かれています。こちらは替え紋で夕顔に三日月紋です。

さて、又日庵の話が続きましたので、玄々斎の代表的な作品に移りたいと考えます。まず、一番にご紹介したいのが、五器と呼ばれる五つの道具です。姫路藩主酒井家の御用商人、紅粉屋・児島有隣庵（一八六二）が持ち帰った富士山中の松を用いて、玄々

斎が八代中村宗哲と中川浄益に依頼して製作させた羽衣棗、昇龍茶杓、苦屋船香炉、蟹小舟香合、六花香炉の五点です。いずれも松の皮目を一部残した作りで、採取地である富士山を題材にした意匠となっております。その中でも特に目を引くの



又日庵・玄々斎往復書簡 豊田市郷土資料館蔵



羽衣茶 五器の内 今日庵蔵

は、羽衣茶です。三保の松原に
伝わる羽衣伝説を題材にしたも
のと考えられます。甲から胴部
にかけて、豪華な天女の羽衣が
伸び伸びと蒔絵で表されています。
この羽衣茶と取り合わされ
るのが昇龍茶約ですが、描かれ
た龍は、謡曲「羽衣」に登場す
る漁夫・白竜に因んでいると
も言われています。共筒には
玄々齋が石川丈山（二五八三—
一六七二）の漢詩「富士山」の
前半部を引用し、「仙客来遊雲
外嶺（せんきやくきたりあそぶ
うんがいのいただき） 神龍栖
老洞中測（しんりゅうちゅうさ
みおゆ どうちゅうのふち）（花押）」と
墨書しています。共筒に記され
なかった漢詩の後半は「雪如丸
素煙如柄 白扇倒懸東海天」と
続き、開いた白い扇を逆さまに
したような形で雪をかぶった富
士山が「東海の天」にそびえる



茗屋船香炉 五器の内 今日庵蔵

様子が詠じられています。同じ
三河国出身の丈山に対しては、
目にした富士山の光景や富士山
に対する思いなど、共感できる
部分が多かったのではないで
しょうか。
玄々齋は、和歌を賀茂季鷹（か
ものすえたか）に学んだ他、漢
籍・国文・書道・謡曲・香道な
どの幅広い知識を体得していま



昇龍茶約 五器の内 今日庵蔵

められています。

もう一点、玄々齋が雄大な富
士山の姿を豪快に描き、好み表
具で仕立てた六曲一双の屏風を
紹介します。六曲一双、つまり
十二面のうち、九面には小堀遠
州（一五七九—一六四七）の旅
日記『辛酉紀行』の紙片を配
し、残り三面の余白に玄々齋が
自ら墨で富士山の絵を描いてい

した。そのため、
玄々齋の自作あ
るいは好みの道
具には、二重、
三重に趣向を凝
らしたものが多
く、銘や意匠に
は玄々齋の豊富
な知識が散りば



髪小舟香合 五器の内 今日庵蔵

ます。『辛酉紀行』は、遠州が
元和七年（一六二二）に江戸か
ら京都へ向かった際の旅日記
で、富士山を望み、吉原、府
中、掛川と越えていく旅の行程
が記されています。日記では、
九月二十二日に江戸を立つた遠
州が、同三十日には三河国岡崎
に到着していますが、玄々齋に
とつても、よく見知った道中で
あり、自らその情景を思い浮か
べながら富士山を描いたのでは
ないでしょうか。
以上、今回の展覧会の主要作
品の中からその見どころを紹
介いたしました。
（注）一般的には、「威帳」と表
記するが、作品の外題ならびに
所蔵先での名称表記に従い、こ
こでは「倉帳」と表記する。



六花香炉 五器の内 今日庵蔵